生きた教訓

県内で約8千人の死者、行方不明者を出した震災の中、明治、昭和の大津波による惨禍の記憶を忘れず、人的被害を最小限にとどめた地域がある。住民の命と集落の灯を守ったのは、地域ぐるみの高所移転や避難路の整備、そして何より高い防災意識だった。専門家は震災の教訓を後世に受け継ぎ、地域の青写真を描くことが復興の鍵を握ると説く。

「昭和三陸」後、高台に移住

陸前高田・集集落 伊藤さん

昭和三陸大津波を機に高台に移転し、被害を免れた伊藤アヤノさん方＝陸前高田市広田町

孫の啄哉さんの死を悼む伊藤アヤノさん（中央）と、（右から）啄哉さんの父一夫さん、母テツ子さん、近くに住む伊藤弘一さん

今度も助かった

避難誘導中の孫は無念

「おかげさまで、今度も助かりました。でも…」

陸前高田市広田町の集集落に住む伊藤アヤノさん(101)は、深く刻まれたしわに、苦渋の表情を浮かべる。

東日本大震災では、津波がアヤノさん宅の数メートル下まで駆け上がったが、集落の24世帯全てが被害を免れた。

だが、アヤノさんの孫で市農林課職員の啄哉さん(40)は、避難所に指定されていた同市高田町の市民体育館で避難者を誘導中に津波に遭い、帰らぬ人となった。

「息子は、最後まで市職員の職務を全うして死んだ。仕方なかったと思う。だが、なぜ避難所が…。小中学生の子ども3人を残して逝った息子の無念は、どれほどのものだったろうか」

アヤノさんの長男で、啄哉さんの父一夫さん(72)は、痛恨の思いをこらえきれない。

アヤノさんは1933（昭和8）年3月、昭和の大津波で被災した。当時23歳。2歳の娘をおぶったまま津波にのみ込まれたが、たまたま高台に流され九死に一生を得た。

しかし、海岸近くにあった自宅は押し流され、夫と息子2人を含む家族5人を亡くした。

15人の犠牲者を出した集集落は、その後全戸が高台へ移転。60年のチリ地震津波では大きな被害を受けなかったが、地域住民は78年前の教訓を忘れず、高台に住み続けた。

だが、啄哉さんがいた同市高田町は、チリ地震津波で市街地の一部が流されたものの、街中が壊滅状態となった今回のような甚大な津波被害を受けたことはなかった。

一夫さんは「高田町は油断したのだろう。漁のたびに坂道を往復する高台の暮らしは楽ではなかったが、集が犠牲者を出さなかったことで、津波から命を守るには高い所に住むしかないことが証明された」と話す。

街中ががれきの山と化し、ゼロからの復興を目指す陸前高田市。

啄哉さんの母テツ子さん(70)は「どんなに立派な防潮堤を造っても、いつかは越される。息子の無念を晴らすためにも、生き残った人たちは今度こそ高い所に津波に負けない街をつくってほしい」と願う。

此処より下に家を建てるな

宮古・重茂 姉吉地区

「此処より下に家を建てるな」。明治、昭和の三陸大津波によって2度の壊滅的な被害を受けた宮古市重茂の姉吉地区に教訓を伝える石碑がある。今回の大震災で予想を超える波が各地に襲来する中、先人の教えが本州最東端の鮭ケ崎に最も近い11世帯約30人の集落を守った。

「此処より下に家を建てるな」と先人の津波被害の教訓を伝える石碑＝宮古市重茂

集落守った石碑

2度全滅の歴史刻む

石碑は姉吉漁港から数百メートル坂を上った場所で、集落の最も海側の住宅から約100メートル下にある。建ったのは昭和三陸大津波があった1933（昭和8）年以降とみられる。

姉吉地区は津波によって、これまで全滅に近い被害を受けてきた。住家が漁港周辺にあった1896（明治29）年には数十人が犠牲となり、生存者は2人。1933年は生存者4人だった。以来、住宅が石碑より海側に建ったことはない。

今回の大震災では住民は集落周辺より、さらに高台に逃げた。岩が崩れたような音が響いたためだ。

自治会長の木村民茂さん(64)は「集落が2度も全滅したことが、みんなの心にある」と危機意識の高さを証言する。津波は先人の教え通り、石碑より海側でとどまった。

ただ住民の心は晴れない。津波襲来当時、たまたま他の集落にいた同地区の4人が行方不明だからだ。木村さんは「いくら家が助かっても、人がいなくなっては意味がない」と無念の表情を浮かべる。

漁業被害が大きかったことも心を暗くする。倉庫10棟とともにほとんどの漁具が流失した。「職場がそのまま持っていかれた」と不安を抱える。

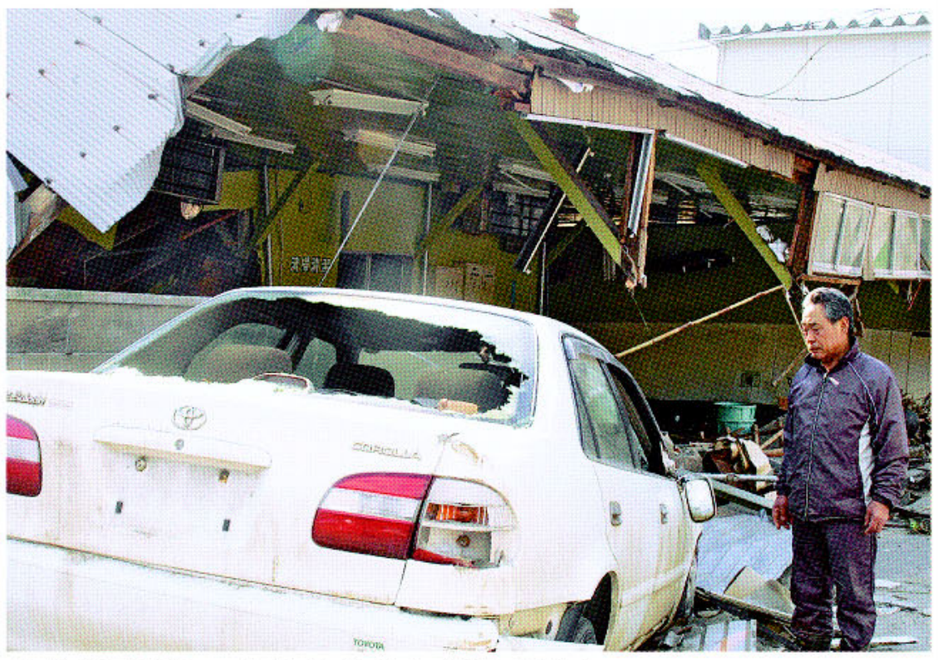
今回の教訓について、木村さんは「地震の大小に関係なく津波を甘く見てはいけない。ずっと言い続けなければならない」と後世に伝える考えだ。

防潮堤より日ごろの備え

宮古・角力浜町内会

誘導路整備、マップ配布

防災意識高め合う



流された自家用車の前に立つ鳥居清蔵さん。「津波被害を防ぐには、地道に防災意識を高める必要がある」と訴える

宮古市の角力浜町内会（鳥居清蔵会長）は、町内会独自の津波防災の取り組みで、人的被害を最小限に食い止めた。同町内会を含む鍬ケ崎地区は、防潮堤が未整備で、津波による甚大な被害の危険性が指摘されていただけに、日ごろの備えが実を結んだ形だ。

角力浜町内会は、40世帯約110人が住み、65歳以上の高齢者は4割。鳥居会長(72)によると、80代男性1人の遺体が確認されたが、そのほかの住民は避難し無事だった。

鍬ケ崎地区は、宮古湾に面し、住宅が密集する一方、防潮堤が整備されず危険性が指摘されていた。宮城県沖地震の想定では、角力浜町内会は高台の2、3世帯を除き被害区域に入っていた。

同町内会は2006年、地震津波発生時に備え地区内の高台に避難誘導路を整備。同年から毎年、誘導路を使った訓練を行うなど住民の防災意識を高めてきた。

06年6月には、津波浸水予想や避難誘導標識、緊急避難場所などを盛り込んだ津波避難マップを作成し、町内会全世帯に配布した。

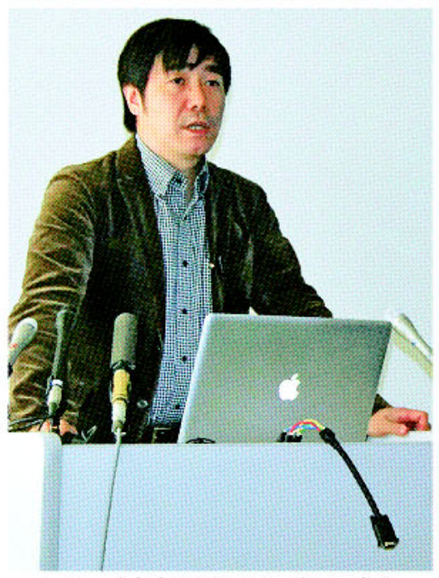
子どもの参加を促し、海の目の前にある以上、備えは当然で、個々で逃げる意識を持つことが、人的被害を最小限に抑えることになる」と指摘した。

鳥居会長は「津波の威力をまざまざと見せつけられた。建物被害は予想外で悔しい思いがある」とした上で、「比較的早い時間にそれぞれが避難し、訓練の成果が出た。地区が活動に取り組んできた。

「明治三陸」の教え 現代に

東北大大学院・越村准教授

復興計画の早期策定を



明治三陸大津波の教訓を現代に置き換える必要性を訴える越村俊一准教授

東北大大学院工学研究科災害制御研究センターの越村俊一准教授は東日本大震災の復興に向け、「津波の教訓を現代に置き換え、共有することが必要」と明治三陸大津波（1896年）の教訓を生かすことを強調する。「三陸全体のグランドデザインを提示しなければならない」と、被害の実態把握とともに復興計画の早期策定も提言している。

越村准教授は1日、仙台市の同センターで開催された東日本大震災の調査速報会で発表。災害の全容解明とともに人的被害の拡大要因、これまでの津波対策を抜本的に検証する考えを述べた。

その上で「基礎情報を収集し、悲劇を繰り返さないための教訓をどう取り込み、残すかが重要」と提言。「（人工衛星などを活用し被害状況を測定する）リモートセンシング技術と現地調査を相互補完し、復興計画の立案推進の基礎となる膨大な情報を集め後世に残したい」とした。重視するのが浸水域で「津波がどこまで来たか詳細に把握することが、復興計画や生活再建に重要」と調査を進める。

明治三陸大津波の被害を示し、「当時の国家予算の10分の1程度の被害額が推定されている。それでも三陸の人々は何度も津波を経験して、しなやかに立ち直ってきた」と述べ、明治の津波後、豊漁や高所移転が再建につながったと説明した。

一方、当時の高所移転の問題点として▽土地への執着心▽大漁が契機となり浜小屋を作ってしまった▽津波を知らない住民の移入―などを挙げ、「被害に遭った場所をどうするかを考えないと再び居住し、同じ津波被害が起きかねない。明治後の昭和の津波で同じことが起きた。当時何をして何が失敗だったかを共有したい」とした。

その上で「住民の生活再建、希望につながる水産業の復活に優先的に取り組みたい。法制度や融資、漁船確保や市場の再開、食の安全宣言などが不可欠」とし「復興へ三陸全体のグランドデザインを早く描かなければならない」と強調した。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。